

# 釣れ釣れなるままに

2015年思い出の釣行記 PART. 3

## 朱鞠内湖のワカサギ釣り

### 魔島釣狂



朱鞠内湖遊漁エリア（幌加内観光協会HPより）

釣行月日 3月8日(日) 7:00~14:00

入釣場所 朱鞠内湖 水道沢 弁天裏

天 気 晴れ時々曇り 微風

釣 果 ワカサギ 32匹

堀部安兵衛が砂川遊水池でまたもやワカサギの1000匹超えを達成した。遊水池での遊漁は2月末までと限定されており、その最後の土曜日に出撃したのだ。私にもお誘いがかかったのだが、あいにく勤務を入れており、その恩恵にあずかることは出来なかった。

安兵衛は遊水池での釣りが出来なくなるということで、これからは釣期が4月10日までとなっている朱鞠内湖に本拠地を移すという。朱鞠内湖をまだ一度も経験したことのない私にもお誘いがかかって3月8日午前3時に岩見沢の我が家を出発した。「つりしん」の朱鞠内湖釣況MAPには星印が3つ付いており、アイランド周辺や二股沢周辺の氷上釣りで6~10cmが10~200匹と記載されていた。



朝靄の中で朱鞠内湖畔は眠りから覚めた



### 早朝から続々とワカサギ釣りファンが集結してきた

管理事務所へのゲートは午前6時に開けられる。(入漁料一人1,100円、駐車料1台300円、スノーモービル一人900円) 私達が到着したときには、既にその開門を待って50台ほどの車の列が出来ていた。朝まずめを狙って少しでも早く湖の上に立っていたという思いがそうさせているのだろう。本日の釣り場は、スノーモービルを利用することにして二股沢奥とした。スノーモービルの運転は7時からとなっているので、管理事務所の係員に各釣り場の状況を確認することになった。すると、あいにく二股沢奥は「釣りコンin朱鞠内 20~40代までの独身男女」と銘打ったイベントが開催されることになっていた。一緒に参加したいものだが、どの様に見ても40代とは見てくれないだろう。

本日同行する旭川組の大石内蔵助、大石主税が到着した。訳を話すと、まずは近くの水道沢で始めてみようということになった。水道沢では2組がテントを張っていたが、その近くで穴を開けて釣り始めてみた。テントを張らずに、深さ10m程の底を狙っていると、道糸が僅かに振れる程度のアタリがあり、5cmに満たないようなワカサギが釣れてきた。朝日を浴びて淡い山吹色に輝いていた。陽の光に翳してみるとその背骨や卵巣が透けて見えた。仲間は全然釣れていないようだ。微妙なアタリに合わせて9匹釣ったところで、移動の声が掛かった。

今度は、弁天裏に向かった。旭川組が過去にいい思いをしたことがあるようで、当初からここに向かうつもりだったようだ。



私達は弁天裏にテントを設置した



手前は大石内蔵助、奥は大石主税。吉良邸討ち入りの策を練る

弁天裏にも先行者がいてテントを張っていた。野天で釣りをしていた釣り人に様子を伺うと、僅かだが釣れ始めたようだった。私達もここで腰を落ち着けることになり、テントを張った。しかし、全然アタリが出ない。旭川組は少し好釣のようで、浚刺とした声が聞こえてくる。深さは10mだそうだ。私達のテントは彼らの岸側に張って深さ4m。岸から急な駆け上がりになっているらしく、ほぼ隣同士でテントを張ったにも関わらずこれだけの違いになるのだ。

釣れないことおびたらしい。今日は陽も差して暖かいので、テントの外に出て、釣れる穴を捜して歩くことになった。私は、テントの少し沖側の穴に仕掛を落とした。深さは14mもあった。

氷の穴の縁の真っ白い雪の上に、小さな黒い虫が動いている。なんだろうと観察していると蜘蛛のようだった。こんな何もない雪の上でどの様にして生きてきたのだろうか。それが、水の中に落ちた。溺れてしまうのだろうかと思つてみると、素早い動きで水の上を這い回った。ミズスマシのように泳いでいるようにも見える。自然の神秘的な営みに我を忘れて見入ってしまった。

大石内蔵助がテントから這い出てきて、私の向かいの深さ9mの穴を探り始めた。内蔵助はすぐにダブルでワカサギを釣って見せた。私の穴よりはマシなようだった。私は5匹釣ったところで、弁天島側に移動した。深さは8m。4匹釣ったところで寒くなってきたのでテントに戻った。今度は安兵衛が弁天島の更に奥の方に遠征した。テントの中に入った私の竿にアタリが出ることはない。安兵衛がすごすごと出戻ってきたが、釣果はなかった。私の釣果ももちろんない。

安兵衛がコマセを撒き始めた。遊水池ではウグイが寄るので使っていなかったのだが、背に腹は替えられない。そして思っていたとおりに20cmほどのウグイが1号の狐バリを喰ってきた。そう言えば、前日の朱鞠内釣りブログには「新規ポイント（藤原島南）はウグイ祭り」という記事があったのだ。藤原島南は、私達がテントを張った向かいの島だ。



キタキツネ

テントの近くを狐がエサを求めて歩いている。夏に見かけるやせ細った狐とは違い、胸に真っ白な冬毛を抱えたふくよかな狐だ。私が近寄っていても逃げようとはせずに愛くるしい瞳で見つめ返してくる。安兵衛の釣ったウグイを雪の上に投げてやる。バリバリと音を立ててかみ砕いてから呑み込んだ。思わぬ獲物に満足して立ち去るのかと思ったが、テントの周りから離れない。その狐に「またちょうだい」と訴えかけられても、安兵衛が釣った2匹のウグイは、狐の胃袋に収まってしまったのだ。ここでふと思い出した。管理棟の壁に「野生の動物にエサをあげないで下さい」という注意書きがあったのだ。愛くるしい瞳に見つめられて、思わずその禁を破ってしまったのだ。狐に責任があるはずもなく、自分のしてしまった迂闊な行動で、野生との距離を縮めてしまったのだ。開けた氷の穴に刺すための竹の棒を持って、大声を上げて追い払うことになった。情けない。

名寄からの二人組が私たちの奥30mほどの所にテントを張っていた。声を掛けてから中を覗いてみた。それぞれ100匹を超える釣果があり、お互いに向かい合って電動リールを駆使していた。朱鞠内湖は深棚なので、電動リールが攻略の必須アイテムなのだそう。冒頭の朱鞠内湖遊漁エリアを見ていただいても分かるように、こんなに広い湖で釣り場を引き当てるのは、宝くじの当たり籤を引き当てるごときのように思う。彼らは、この朱鞠内湖に何度も通い、良い時ばかりではなかったようだが、今日はその籤を引き当てたようだ。

砂川遊水池のレジェンドと称され、朱鞠内湖でもその伝説を作り上げていくように思え

た安兵衛だったが、まだまだその域には達していないようだ。先ほど言った籤を引き当てる感の冴えもレジェンドには必要とされているのだ。

テント内では相変わらずアタリが出ない。またまたテントから這い出て、今度は内蔵助から引き継いだ穴に仕掛を落としてみた。すぐにダブルで来たが後が続かない。2:00 近くなって、安兵衛がテントを畳み始めた。その穴で私が10匹を手にしたところで、約束の終了時間となってしまった。



カウンターは32で止まっていた

私のカウンターは32で止まっていた。テント内での時間が一番多かったのだが、引き算してみると4匹しか釣果がなかったことになる。32匹（全釣果）－9匹（水道沢野天10m）－5匹（弁天裏野天14m）－4匹（弁天島野天8m）－10匹（弁天裏野天9m）＝4匹（弁天裏テント内）。

帰り際に、弁天島に設置されたテントの横に雪に囲われた方形の水槽が作られており、その中に35cm程の鱒が泳いでいた。鈴を付けた5本の短竿が沖の方に向かって1列に並んでいたが、ワカサギを生き餌にした仕掛に食いついてきたのだそう。テント内のもう1本と合わせて計3本の釣果があったということだった。

内蔵助は、所属している旭川の釣り会の初釣りで、来週また朱鞠内湖に来るそう。その時は、今日の仇討ちを兼ねて鱒仕掛を準備してくるという。また、安兵衛に言わせると、鱒の釣果が上がっている近辺にはワカサギが近寄らないのだそう。彼も同じように来週

仇討ちを期しているようだが、ワカサギにはワカサギでと考えているようだ。



弁天島では鱒が上がっていた。釣り人は札幌市の高橋氏



今日も安兵衛に身を任した殿様釣りだった。帰りの道中、安兵衛のお言葉に甘えてワンカップに口をつけてほろ酔い加減になっていると、またまた「矢切の渡し」の鼻歌が出てきた。相変わらず古臭いなと思いつつもやはり物悲しいときには演歌である。ワカサギの艶めかしい容姿から艶歌といきたいところであるが、今日の無様さでは怨歌と言わざるを得ない。

朱鞠内の湖畔 「矢切りの渡し替え歌」 鹿島釣狂

「連れて行ってよ」

「釣れて欲しいよ」

朝焼けの霧に霞む 朱鞠内の湖畔

妻の心に 背いてまでも

釣りに生きたい 二人です

「見捨てないでね」

「捨てはしないよ」

北風が泣いて吹く 朱鞠内の湖畔

噂悲しい 水道沢捨てて

竿に任せるさだめです。

「どこへ行くのよ」

「知った弁天裏だよ」

揺れながらソリが軋む 朱鞠内の湖畔

息を殺して 身を寄せながら

今日は釣れない ワカサギです

安兵衛の初任地は幌加内町なのだ。安兵衛は朱鞠内湖からの道中、自分が一時期住んだこの町について様々な案内をしてくれた。雨竜川堰堤、下宿のおばさん、甲斐甲斐しく働く娘、出されたお粥、近所のホルモン屋、蕎麦屋「霧立亭」、政和温泉「ルオント」、幌立山スキー場等々。

何だか安兵衛の話を聞いているうちに、「南こうせつとかぐや姫」が歌った「神田川」の情景が目につかんできた。東京という大都会とはかけ離れた幌加内という山村なのだが、私たちが青春を駆け抜けたその時代風景が似ているということなのだろう。歌詞に出てくる「横丁の風呂屋」や「三畳一間の小さな下宿」には、私たちの年代の実体験を思い起こさせるものがある。

この曲を作詞した喜多条忠が、早稲田の学生だったころの自分の同棲体験をモチーフに

作詞したのがこの「神田川」ということだ。その風呂屋「安兵衛湯」という名の付いた銭湯は実際に現存していたそうだ。この一帯は江戸時代に「高田馬場」があった地域。つまり「高田馬場という地名の由来の地」にあたり、堀部安兵衛が仇討ち加勢現場に遅れてかけつけ、ばったばたと相手を斬り倒したことで有名である。銭湯の名前も、むろんそれにちなんだものだったのだろう。「三畳一間の小さな下宿」も歌詞から連想するとこの銭湯の近くにあったと思われる。

何と奇遇なことか。私の釣友である堀部安兵衛とこの「神田川」が繋がってしまったのだ。

安兵衛のクラシックカーは、今日が最期だという。明日には「ドナドナ」のメロディにのせてディーラーに引き取られていくのだ。しかし、売られていくのではなく廃車措置がとられるという。先日、野良仕事や山菜採りで使ってきた軽トラをも廃車にして、新しい軽トラに乗り換えた。クラシックカーに搭載されていたカーナビやETCも軽トラに移し替えて、これからは、その軽トラを駆って釣り場に向かい、沖釣りで大漁したブリやイカ、タラを満載にしてくるのだという。うひょー、ひょー。